



<33>

福村 俊治

小さな都市社会

集合住宅団地は建物や土地を効率よく共有しながら、みんなで楽しく暮らすことのできる「小さな都市社会」である。一戸建住宅の多い日本に比べ、ヨーロッパは多くの集合住宅と公園、ほかの公共施設がうまく配置され、美しい都市が計画的につくられてきた。

第二次大戦後、世界中で人口の都市集中が起り、大規模な集合住宅団地が建設された。沖縄でも日本復帰前後から多くの公営住宅団地がつくられた。その一つ、豊見城市の南東部に位置する「豊見城団地」は、一九六八年〜七六年に沖縄県住宅供給公社によって建設された千二百余戸の賃貸住宅と、一九七六年に建設された県営住宅百戸の合計千三百余戸、



豊見城団地の再生計画案。団地を核に全体を公園化。従来の地形を最大限生かしている

人口約四千五百人の大規模団地である。また、那覇市中心地より約七キロと利便性の良い高台に位置し、団地敷地(約二二三〇坪)内には、広いオープンスペースのほか、小学校、幼稚園、二つの保育園、郵便局、駐在所、自治集会所などの公共施設が整い、近くには商店街や大きなスーパーがある。団地コミュニティも成熟し、自治体活動も活発で、住民の多くも団地生活をエンジョイしている。

団地再生の試金石

しかし、団地住棟は建設後二十五〜三十五年程度しか経過していないにもかかわらず、塩害によるコンクリート劣化がひどく、コンクリート片の落下などが頻繁に起きる危険な状態となっている。そのため、今春にはもつとも劣化の激しかった二棟が取り壊された。また、数年前より団地再生にむけて住宅供給公社や団地住民が中心になって話し合い、さまざまな計画案をつくってきたが、公社の財政難のため順調には進んでいない。

私はこの団地の再生が、ほかの老朽化した沖縄の団地建て替えや都心の再生、街づくりの「試金石」だと考えている。これまでの街づくりは、一人ひとりがより良い住環境を求めて郊外に一戸建てを造ってきた。その結果、



老朽化が進み、コンクリート片の落下など、危険な状態にある。再生計画に注目が集まる

都市再生と環境

社会責任に基づく街づくり

夢の都市の青写真

この豊見城団地の再生計画では、中心都市に近いまとまった敷地でオープンスペースや学校や公共施設などのインフラを生かし、この団地に住んでいる人たちが長年培ってきたコミュニティをうまく持続できるようにすることが大切である。自然を壊す宅地造成や、埋め立て地の街をつくるよりは、既存の団地をより良く再生する方がコスト的に安く、美しい沖縄の自然を守ることにつながる。

わたしたちが提案した豊見城団地再生計画は、団地そのものが周辺地域の核となるように公共施設を充実し、団地全体を公園化しているのが特徴。現況の地形を生かし、一部元の地形の斜面に復元しながら、多様な住棟配置や住戸タイプをつくり、住み替えができるものとしている。

各住棟は空中コリドール(回廊)で結ばれ、雨の日でも傘無しで移動できる。センタービルには集会所、老人や子供の施設のほか、図書館や小さなホテルをつくる。また、小さな事務所の集まるオフィスビルを設け、団地内にも働く場をつくる。学校の教室、体育館、温水プールは、休日は住民に開放され、住民の生涯教育の場となる。一方、平日は団地の広い公園やスポーツ施設が学校の教育の場ともなる。人口五千人の「小さな夢の都市」がここに生まれるのである。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

今回は、この計画を実現するために行われた住民ワークショップについて紹介する。(チーム・ドリーム代表